

社長参謀通信

皆様の周りにこの通信が役立つような方がいらっしゃればご紹介頂ければ幸いです。

2012年9月

今月のテーマ「中国の歴史を学ぶ」

隣国を理解することから始めよう

尖閣諸島の国有化をキッカケにして、中国全土100箇所程で反日デモが起こり、日系企業の焼き討ちや日本製品の不買運動、中国への輸出の通関手続きの遅延、日本への中国人旅行者の減少など、様々な面で軋轢が起こっています。戦後アメリカに依存し、のらりくらの玉虫色外交を続けてきた日本としては珍しく白黒をつけに行った行動だと思いません。稚拙な外交手腕だと批判も山ほどありますし、経済的な損失を考えれば何が国益か、と頭をかきげざるを得ないことでもあります。私は政治や外交のことは分かりませんから、今回の行動の成否を論ずることはできません。ただ、**大国中国はこれからも隣国であり、経済面でも切っても切れない関係である**



という事実は変えるべくもなく、相互の違いを理解し、憎悪でなく尊敬と節度をもって良い関係を維持していかなければなりません。

どこの国の人であれ、個人レベルでは良好な関係でも、国家レベルになると個人レベルでは想像できない動きとなって表れます。人も国家も先人のDNAを継承し、歴史の上になりたっています。歴史は価値観と文化を形成し、無意識の言動となって表れてきます。歴史は優れた文化を育むとともに、現代を生きる人に大きな呪縛を与えたりします。

まずは、隣国を良く理解することから。今回は中国という国の特性を理解するために、中国の歴史を勉強してみたいと思います。



モットー

社長参謀として社長の“夢と悩み”を共有し、
人材の育成と経営のしくみづくりを通じて、
会社と社員とのWINWINの関係を作り会社の成長を加速させます。

発行人 三村邦久

16の国境を持つ中国

大陸の中国と島国日本

日本は島国であり、外国から攻められた経験は、元寇と第二次世界大戦のたった二度しかありません。日本海、東シナ海、太平洋という自然のお堀に守られてとても平和な時間を過ごしてきました。民族も単一で大陸の優れた文化のエッセンスを吸収し、神道、仏教、禅、儒教、道教、さらにはキリスト教までも同時に受け入れる多神教で懐の深い独自の文化を育ててきました。これは鎖国ができるような島国であったことが大きく幸いしました。では、ユーラシア大陸東部に位置する中国はどうでしょうか。

人口は10倍以上

中国は世界最大の人口を擁する国家です。約13億人という人口は、統計上含まれない黒孩子（ヘイハイズ）や盲民と言われる浮浪民の人口などによって大きく変わり、実数ははっきりしません。人口の94%を占める漢族のほか、チワン族、ウイグル族、モンゴル族、チベット族、回族、ミャオ族、イ（彝）族、トゥチャ族、満族など、政府が認定している55の少数民族よりなる多民族国家です。

国土面積は25倍

国土面積は、総計9,596,960km²（世界3位）においても世界最大の単一国家で、日本の377,914km²（60位）の約25倍を有します。

16カ国に接する

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマー、ラオス、ベトナムと隣接しています。また黄海や東シナ海を挟んで日本や大韓民国（韓国）とも接しています。ギネスブックによれば最も多くの国（16カ国）と国境を接している国です。国境や領域に関する紛争は、右図にあるように約20あります。他にもチベットやウイグル自治区等、近隣問題や異民族統治に多くの問題を抱えることになっています。

名称	概要
台湾	中華人民共和国(中国)は台湾を自国領土としており、中華民国は中華人民共和国(中国)の実行支配地域を自国領土としています。
尖閣諸島 魚釣島	1895年1月14日に日本で閣議決定されてから現在に至るまで実効支配し日本固有の領土でしたが、1970年6月に台湾が、1970年12月に中国が領有権を主張してきました。
モンゴル国とトゥヴァ共和国	1911年の辛亥革命が起こった際に独立しました。しかし中華民国(台湾)は現在も外蒙古の地域が自国領土と主張しています。また、近年になり中華人民共和国(中国)も自国領土と主張しています。
江東六十四屯	ロシア領でありながら、中国人が多かったため清国の管理下におかれました。その後中華人民共和国(中国)はこの地の主権を放棄することとなりました。しかし、中華民国(台湾)は現在も江東六十四屯の地域が自国領土と主張しています。
パミール高原葱嶺	中華人民共和国(中国)とタジキスタンの間にある標高約5000mの高原です。近年になり中華人民共和国(中国)も自国領土と主張しています。
ワハーン回廊 ワハーン渓谷	西側がアフガニスタン、東側が中華人民共和国(中国)、南がパキスタンとなっています。かつては清朝が支配していたという理由から、中華民国(台湾)は現在もワハーン回廊が自国領土と主張しています。
インドのアルナーチャル・プラデーシュ州	インド北東部にある地域で、南はインドのアッサム州、北は中華人民共和国(中国)、東はミャンマー、西はブータンと接しています。アルナーチャル・プラデーシュ州は中華人民共和国(中国)も領有を主張しています。
ミャンマー北部江心坡(こうしんは)	現在のミャンマー北部にある地域で、中国の雲南省に属していました。かつては清朝が支配していたという理由から、中華民国(台湾)は現在も江心坡が自国領土と主張しています。
南沙諸島(スプラトリー諸島)	東シナ海に浮かぶ100余りの島々で、ベトナム、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、中華民国(台湾)、中華人民共和国(中国)が領有権を主張しています。
西沙諸島(バラセル諸島)	南シナ海に浮かぶサンゴ礁から構成された島々です。現在は中華人民共和国(中国)が滑走路や港などを整備し実効支配していますが、ベトナムと中華民国(台湾)も領有権を主張しています。
中沙諸島	東シナ海に位置しており、西沙諸島の東南約100kmの位置にあり、現在は中華人民共和国(中国)、中華民国(台湾)、フィリピンが領有権を主張しています。
東沙諸島	南シナ海に位置しており、現在は中華民国(台湾)が実効支配していますが、中華人民共和国(中国)が領有権を主張しています。
カシミール地方	インド、パキスタン、中華人民共和国(中国)の国境付近で、インド、パキスタン、中華人民共和国(中国)が領有権を主張し、インドとパキスタンは過去に何度か軍事衝突(カシミール紛争)を起こしています。
アクサイチン	カシミール地方の一部で、約3万平方キロメートルの地域です。インドと中華人民共和国(中国)が領有権を主張しており、現在は中華人民共和国(中国)が実効支配しています。
中ソ国境紛争	中華人民共和国(中国)とソビエト連邦間の国境問題による紛争です。1969年3月2日と15日にアムール川(黒竜江)支流のウスリー川にあるダマンスキー島(珍宝島)の領有権をめぐる紛争が発生しました。
中印国境紛争	中華人民共和国(中国)とインドの国境問題による紛争です。1959年に中華人民共和国(中国)がインドに進行し、カシミール地方の東部のアクサイチン、ラダック、ザンスカール、バルティスターン、アルナーチャル・プラデーシュ州などで戦闘となりました。
ベトナム国境紛争 高山戦役	1984年に中国軍がベトナム側に砲撃したのをはじめに、3度の大きな両軍の衝突が発生しました。中華人民共和国(中国)とベトナムの関係が回復したことで、中国軍が撤退しました。
韓国可居礁	黄海にある暗礁。暗礁であるため領土として認められていませんが韓国政府は可居礁と名づけており、中国と韓国間で黄海の排他的経済水域の紛争の1つとなっています。
蘇岩礁	東シナ海にある暗礁で、中国と韓国間で東シナ海における排他的経済水域の紛争の1つとなっています。暗礁であるため領土として認められていませんが韓国政府は済州特別自治道・西帰浦市に所属する島であると主張しています。
丁岩礁	東シナ海にある暗礁で、中国と韓国間で東シナ海における排他的経済水域の紛争の1つとなっています。中華人民共和国が1999年から2002年にかけて調査を行い発見しましたが、韓国海洋水産部が波浪礁と名づけ領有を主張しています。

世界の先進国だった中国

中国4000年の歴史

中国の黄河文明は古代の四大文明の一つに数えられ、紀元前 7000 年～1600 年まで栄えました。また黄河文明よりもさらにさかのぼる長江文明が存在したと言われていて、長い歴史をもった世界でも稀な国という事が出来ます。

夏／殷／周

史記では伝説と目される三皇五帝時代に続いて夏王朝について記述されています。夏については実在が確かでなくまた定説もありません。

商朝（殷）が実在の確認されている最古の王朝で、王が占いによって政治を行っていました（神権政治）。殷は山東で興ったとされましたが、近年は河北付近に興ったとする見方が有力で、黄河文明で生まれた村のうち強大になり発展した都市国家の盟主であったと考えられます。

周朝は紀元前 11 世紀頃に殷を滅ぼし、各地の有力者や王族を諸侯として封建制をおこないました。しかし、周王朝は徐々に弱体化し、紀元前 403 年から始まるとされる戦国時代には、周王朝の権威は無視されるようになります。

春秋戦国時代

春秋戦国時代は、諸侯が争う戦乱の時代でありました。しかし春秋末期最強の都市国家晋が三分割されたころから趙氏が農村を経済的ではなく封建的によく支配し、それまで人口多くてもせいぜい 5 万人程度だった都市国家が富国強兵に努め、商工業が発達し、貨幣も使用し始めやがて領土国家に変貌しました。その国都となった旧都市国家は 30 万人規模の都市に変貌しました。また鉄器が普及したこともあって、農業生産も増大しました。



諸子百家

このような戦乱の世をどのように過ごすべきかという思想がさまざまな人たちによって作られました。「諸子」は孔子、老子、荘子、墨子、孟子、荀子などの人物を指し、「百家」は儒家、道家、墨家、名家、法家などの学派を言います。

百家争鳴の中で、秦に採用されて中国統一の実現を支援した法家、漢以降の王朝に採用された儒家、民衆にひろまって黄老思想となっていた道家が後世の中国思想に強い影響を与えました。また、兵家の代表である孫子は、戦術・政治の要諦を見事に短い書物にまとめ、それは後の中国の多くの指導者のみならず、世界中の指導者に愛読されています。

秦の始皇帝登場

秦は、戦国時代に着々と勢力を伸ばしました。勢力を伸ばした背景には、厳格な法律で人々を統治しようとする法家の思想を採用して、富国強兵に努めたことにありました。秦王政は他の 6 つの列強を次々と滅ぼし、紀元前 221 年には史上はじめての中国統一を成し遂げました。始皇帝は、法家の李斯を登用し、中央集権化を推し進め、中央から派遣した役人が全国の各地方を支配する郡県制が施行されました。また、文字・貨幣・度量衡の統一も行われました。遊牧民族の匈奴を防ぐために万里の長城を建設させました。しかし、このような中央集権化や土木事業・軍事作戦は人々に多大な負担を与え、そのため紀元前 210 年に始皇帝が死ぬと、翌年には陳勝・呉広の乱という農民反乱がおき、これに刺激され各地で反乱がおき、ついに秦は紀元前 206 年に滅びました。



項羽と劉邦

秦が滅びたあと、劉邦と項羽が覇権をめぐって争った（楚漢戦争）が、紀元前 202 年には、劉邦が項羽を破り、漢の皇帝となりました。

劉邦は、始皇帝が急速な中央集権化を推し進めて失敗したことから、一部の地域には親戚や臣下を王として治めさせ、ほかの地域を中央が直接管理できるようにしました。これを郡国制といいます。紀元前 141 年に即位した武帝は、国内の安定もあり、対外発展を推し進め、匈奴を撃退し、朝鮮半島北部、ベトナム北中部にも侵攻し、これらの地域はその後にも強く中国文化の影響を受けることとなりました。



儒教による徳治政治

武帝は董仲舒の意見を聞いて、儒教を統治の基本とし、以降中国の王朝は基本的に儒教を統治の基本としました。一方で文帝の頃より貨幣経済が広汎に浸透しており、度重なる軍事行動と相まって、農民の生活を苦しめました。漢の宮廷では貨幣の浸透が農民に不利益であることがしばしば論じられており、農民の救済策が検討され、富商を中心に増税をおこなうなど大土地所有を抑制しようと努力しました。

三国志の時代

黄巾の乱が鎮圧されたあと有力であったのが、後漢王朝の皇帝を擁していた曹操です。中国統一を目指していた曹操は、208年に赤壁の戦いで、江南の豪族孫権に敗れました。結局、曹操の死後、220年に曹操の子の曹丕が後漢の皇帝から皇帝の位を譲られ、魏を建国しました。これに対して、221年には、現在の四川省に割拠していた劉備が皇帝となり、蜀を建国しました。さらに、江南の孫権も229年に皇帝と称して、呉を建国した。この魏・呉・蜀の三国が並立した時代を三国時代といいます。



曹操

才能 VS 人徳

項羽と劉邦、曹操と劉備。時代は違うものの切れ者で才能に溢れた項羽と曹操、人徳に溢れ劉邦と劉備。このコントラストが日本人をこの時代の歴史小説の虜にする所以ではないかと思います。そして最後は、人徳を有する者が勝つというヒーロー性にも我々は惹き付けられます。



劉備と諸葛孔明

世界一の都市「長安」

581年に、鮮卑系の隋が北周にとって代わりました。隋の文帝は、均田制・租庸調制・府兵制などを進め、中央集権化を目指しました。また試験によって実力を測る科挙を採用しました。しかし、文帝の後を継いだ煬帝は江南・華北を結ぶ大運河を建設したり、度重なる遠征を行った為に財政が逼迫、民衆の負担が増大。農民反乱が起き、618年に隋は滅亡しました。

隋を滅ぼした李淵が中国を支配したのが唐で、隋の支配システムを受け継ぎ、律令制を完成させました。第2代の皇帝（太宗）李世民は、三省六部・宰相の制度を確立させ、その政治は貞観の治として名高いものです。その治世について書かれたものが『貞観政要』であり、日本や朝鮮にまで帝王学の教科書として多く読まれました。唐の都の長安は、当時世界最大級の都市であり、各国の商人などが集まりました。西方にはシルクロードによってイスラム帝国や東ローマ帝国などと結ばれました。また文化史上も唐時代の詩は最高のものとされています。



李淵

中華思想の誕生

このような卓越した歴史を持つ中国。儒教的な王道政治の理想を実現した漢民族を誇り、文化・思想も最も価値のあるものであると自負するようになっていきました。つまり中国が世界の中心であるという中華思想が育ってきたのでしょう。同様の現象はフランスやアメリカにもあるようです。

侵略統治された屈辱的歴史

蒙古人が支配した元朝

13世紀初頭にチンギス・カンが、モンゴルの諸部族を統一し、蒙古帝国（モンゴル帝国）を建立した。1271年にクビライは元を国号として中国支配をすすめました。元朝は中国の伝統的な統治機構を採用せず、儒教的な教養を身に付けた士大夫層は冷遇され、政権から遠ざけられました。



モンゴルは必然として、モンゴルに帰順した順序によって、支配下の民族の扱いにある程度格差が見られるようになり、これが有名な、モンゴル人・色目人（ムスリム）・漢人・南家の四等身分制度とされていました。元王朝では財務に優れた色目人たちには財政部門を、文化・宗教関係部門にはチベット人やインド、ネパール、カシミール地方の出身者を、そして科学・学術・情報・技術分野にはあらゆる地域出身の人々が登用されました。科挙によらず縁故により人材を登用し、特にモンゴル人の中国への同化を嫌った元の政治制度はきわめて特異であり、その分権的で中世的な支配は、唐代以来の貴族階層及び農奴制の解体と皇帝独裁へと進みました。中国の歴史の大まかな流れからみれば大いに時代逆行的で、奴隷制へ逆行した弊害は大きく広範な産業（特に農業全般、漁業、鉱業全般）において停滞期に入っていったのでした。

明の誕生

紅巾党の中から頭角をあらわした朱元璋は、1368年に南京で皇帝に即位して明を建国しました。同年、朱元璋は元朝の国都の大都を陥落させ、元の政府はモンゴル高原へと撤退しました。

女真(満州)族が支配した清朝

17世紀初頭には、現在の中国東北地方でヌルハチが女真族を統一しました。その子のホンタイジは中国東北地方と蒙古を征服し、清朝を建国し、李自成が明を滅ぼすと清朝の軍隊は万里の長



城を越えて、李自成の軍隊を打ち破り、中国全土を支配下に置きました。17世紀後半から18世紀にかけて、康熙帝・雍正帝・乾隆帝という3人の賢い皇帝の下で、清朝の支配領域は中国本土と中国東北地方・モンゴルのほかに、台湾・東トルキスタン・チベットにまで及びました。

産業革命に乗り遅れた悲劇

19世紀に入ると産業革命が進む欧米と中国との力関係が逆転し、特にナポレオン戦争後の世界の覇権を握ったイギリスを中心として中国侵略が開始され、後発のロシアや日本もこれに加わりました。



18世紀が終わるまでには、清とヨーロッパとの貿易はイギリスがほぼ独占していました。イギリスは赤字を補うため麻薬であるアヘンを中国に輸出し始め、結果イギリスは大幅な貿易黒字に転じました。中国にはアヘン中毒者が蔓延し、この事態を重く見た清朝政府は、1839年に林則徐に命じてアヘン貿易を取り締まらせました。これに反発したイギリス政府は清に対して翌1840年宣戦布告しました。

アヘン戦争と呼ばれるこの戦争では、工業化をとげ近代兵器を持っていたイギリス軍が勝利しました。これ以降、イギリスをはじめとするヨーロッパの列強は中国に対し、不平等条約（治外法権の承認、関税自主権の喪失、片務的最恵国待遇の承認、開港、租借など）を締結させ、中国の半植民地化が進みました。

1911年に辛亥革命が起こり、各地の省が清からの独立を宣言し、翌1912年1月1日、革命派の首領の孫文によって南京で中華民国の樹立が宣言されました。北京にいた清の皇帝溥儀（宣統帝）は、清朝政府内部の実力者である袁世凱により2月12日に退位させられ、清は完全に滅亡しました。



現在の中国ができるまで

中国国民党との中国共産党の誕生

孫文は1914年7月に中国革命党を東京で結成しました。1919年には拠点を上海に移し、中国国民党と改称しました。1921年には上海で中国共産党が成立しました。これらの政党は1918年のロシア革命の影響を受けており、議会政党というよりも明確な計画性と組織性を備えた革命政党を目指しました。1924年国民党は第一回全国大会をおこない、党の組織を改編するとともに共産党との合同（第一次国共合作）を打ち出しました。孫文はこのころ全く機能していなかった国会に代わって国内の団体代表による国民会議を提唱し、これに呼応した馮国璋により北京に迎えられました。1925年には国民会議促成会が開かれましたが、この会期中に孫文は没しました。7月には広東軍政府で機構再編が進み、中華民国国民政府の成立が宣言されました。1925年4月に国民革命軍が正式に発足され、国民党は蒋介石を指導者として軍事的な革命路線を推し進めることとなり、1926年に広州から北伐を開始しました。



日本の中国侵略

日本は中国東北地方の権益を確保しようとし、1931年9月に満州事変がおり、関東軍によって大規模な武力行動がおこなわれました。さらに1937年には、盧溝橋事件や通州事件、第二次上海事変などにより、日本軍は中国本土に邦人保護のために部隊を派遣しました。これにより中華民国と全面戦争に入りました（日中戦争）。これに対し、蒋介石は当初日本との戦いよりも中国共産党との戦いを優先していましたが、二つの党が協力して日本と戦うことになりました。日中戦争は当初日本軍優位に進み、日本軍は多くの都市を占領しましたが、各拠点支配はできても広大な中国において面での支配はできず、これを利用した国民党軍・共産党軍ともに各地でゲリラ戦を行い日本軍を苦しめ、戦線を膠着させました。加えて1941年12月、日本はアメリカや

イギリス（連合国）とも戦端を開きましたが（太平洋戦争）、一方で中国で多くの戦力を釘付けにされるなど、苦しい状況に落ち込まされました。1945年8月ポツダム宣言の受諾とともに日本軍が降伏することで終結しました。

中華人民共和国の誕生

日本との戦争が終結すると国民党と共産党との対立が激化して再び国共内戦が始まりました。アメリカからの支援が減った国民党に対して、ソビエト連邦からの支援を受けていた中国共産党が勝利し、1949年10月1日に毛沢東が中華人民共和国の成立を宣言しました。内戦に敗れた中国国民党率いる中華民国政府は台湾島に撤退しました。



文化大革命でもたらされたブランク

1966年に毛沢東は文化大革命を提唱しました。毛沢東は文革の目的をブルジョワ的反動主義者と実権派であるとし、政治だけにとどまることがなく、広く社会や文化一般にも矛先が向けられ、反革命派とされた文化人をつるし上げたり、各地で文化財破壊や大量の殺戮が行われ、その犠牲者の合計数は数百万人とも3億人とも言われています。また学生たちが下放され農村で働くなど、生産現場や教育現場は混乱すると、特に産業育成や高等教育などで長いブランクをもたらしました。

改革開放から一党独裁へ

1978年12月第11期三中全会で鄧小平が政権を握りました。鄧小平は、政治体制は共産党一党独裁を堅持しつつ、資本主義経済導入などの改革開放政策を取り、近代化を進めた（社会主義市場経済：鄧小平の理論）。この結果、香港ほか日米欧などの外資の流入が開始され、中国経済は離陸を始めました。民主主義化を達成した中華民国と違い、いまだに中国共産党政府による一党独裁から脱却できない中華人民共和国には多数の問題が山積しています。



今月の中国古典「孫子の兵法」

これからの時代難しい相手に如何に対峙していくか。孫子の兵法に学びたいと思います。その特徴と要点について抜粋してみました。



非好戦的、現実主義、主導権の重視

戦争を簡単に起こすことや、長期戦による国力消耗を戒める。「百戦百勝は善の善なるものに非ず。戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」（謀攻篇）

緻密な観察眼に基づき、戦争の様々な様相を区別し、それに対応した行動を行う。「彼を知り己を知れば百戦して殆うからず」（謀攻篇）

「善く攻むる者には、敵、其の守る所を知らず。善く守る者は、敵、其の攻むる所を知らず」（虚実篇）

戦争は国家の存亡がかかる大事

孫子は戦争を極めて深刻なものであると捉えていました。それは「兵は国の大事にして、死生の地、存亡の地なり。察せざるべからず」

（戦争は国家の大事であって、国民の生死、国家の存亡がかかっている。よく考えねばならない）と説いています。

以下、13篇より抜粋しました。

1. 計篇

国家の存亡に関わる問題、開戦前に熟慮せよ

◆勝敗を分ける5つの要素

道：政治

天：陰陽、自然のめぐり

地：土地の情勢

将：才智や誠信、仁慈や勇敢、威厳

法：法規や官職の治め方、軍制

◆敵との7つの比較ポイント

- ・君主は人心を得ているか
- ・将軍は有能か
- ・情勢は有利か
- ・法令は守られているか
- ・軍隊はいずれが強いのか
- ・兵卒は訓練されているか
- ・賞罰は公正に行われているか

2. 作戰篇

戦争は多大な金を必要とし国は貧しくなる。

3. 謀攻篇

謀りごとで攻める、戦わずして勝つ

4. 形篇

- ・態勢、自らは不敗の立場にあつて敵の敗形に乗ずる
- ・よく勝つものは勝ち易きに勝つ

5. 勢篇

- ・個人の能力を超えた総体的な組織の勢い、静的な形から発動する戦いの勢いで相手を撃破する
- ・勢いは斜面で丸い石を転がす様なもの

6. 虚実篇

◆人に致して人に致されず

- ・主導権を握り、相手を思いのまま動かす
- ・理想の形は水。柔軟に相手の隙を突く

7. 軍争篇

- ・敵の機先を制して利益を収めるために競う
- ・風林火陰山雷のような行動によって相手に先んじるものが勝つ

8. 九變篇

常法に拘らず臨機応変に取るべき方法がある

◆将に五危あり

- ・決死の覚悟で駆引きを知らないと殺される
- ・命のことだけ考え勇気が無いと捕虜になる
- ・気短で怒りっぽいのは侮られ計略に陥る
- ・利欲なく清廉なのは恥しめられ計略に陥る
- ・兵士を愛しすぎると兵士の世話で苦勞する

10. 地形篇

◆将の過失

- 「逃亡、ゆるむ、落ち込む、崩れる、乱れる、負けて逃げる」
- ・兵士を赤ん坊のように労わると、危険な土地にもいけ、生死を共にするようになる
 - ・敵情を知って見方の事情を知り、土地のことを知って、自然界のことを知ればいつでも勝てる

編集後記 「失礼な話」

中国の歴史をたった5枚に

今回は高校以来で世界史をひもときました。それも4000年とも5000年とも言われる中国の歴史をたった5枚に纏めました。ほんと失礼な話です。しかし、これだけ凝縮して俯瞰するとその特徴が良くわかってきます。

本文中にはスペースが足りず書けなかったので、ここで纏めてみました。

◆ 中国の特徴

- 1) 紀元前より繁栄し、孔氏、孟子、老子などの現代にも生きる思想哲学を生み出すなど、政治、文化、経済の面で世界の先進国であり中華思想という、選民思想を持つ国である。
- 2) 蒙古や満州族に支配され、そして産業革命に乗り遅れたツケでイギリス始め西洋諸国や日本に植民地化されそうになるという辛酸を舐めた苦い経験を持ち、大きな優越感と同時に根深い劣等感を持つ複雑な心理を有している。
- 3) 中国国民党や中国共産党のように、旧体制に対する武装蜂起などを経て現在の中華人民共和国の建国とへ繋がっており、デモ等の反乱行為に対し、政権はとても敏感。
- 4) 中国人のマナーの悪さは、文化大革命により儒教や仏教などの優れた思想までも追いやられ、精神の荒廃に繋がったと考えられます。しかし、現在中国政府としても儒教教育を政府や企業経営者に行っている。

- 5) 世界の歴史が証明しているように国力（政治力、経済力、軍事力）が高まると周辺国へ勢力を伸ばす可能性がある。（日本も例外ではなく、明治以降富国強兵策をとり、第二次世界大戦まで繋がった。）

このようなことが、言えるのではないかと考えます。隣国中国がいいとか悪いとか言うのではなく、そのような歴史をもった国であり、島国として四方の海に守られてきた日本とは全く違う国だということを理解する必要があるのではないのでしょうか。

世界史を学び大局観を養う

歴史を学ぶことは、自国や相手の国を理解するのに役立ちますが、他にも大局観を養うのに役立ちます。大局観は、根源思考（ものごとの本質を掴む）、長期思考（長いスパンで流れを掴む）、さらに多様性（様々な立場から物事を掴む）の3つの要素で成り立ちます。

外国の歴史を学ぶことは、単なる教養としての歴史学習ではなく、国の利益、企業の利益、個人の生活を守る為にもとても重要なことだと思います。

そして、何よりも様々な時代に多彩な人間が登場して織りなす歴史物語は、人間というものの本質を理解するにも最適で、人間通になりこの世の中の荒波を乗り越えていく上でも有益な示唆を与えてくれます。

株式会社アイパートナー

代表取締役 三村邦久 mimura@i-partner.co.jp

会社電話：045-477-2312 FAX:045-477-2324 会社HP：<http://www.i-partner.co.jp/>

〒 222-0033 横浜市港北区新横浜 2-1 7-1 1 アイシスプラザ 6 階

メルマガ「モチベーション・マラソン」<http://archive.mag2.com/0000266839/index.html>

無断転載はご遠慮ください。